

わたしの戦争体験

福岡市西区 竹内 美智子

昭和18年、私たち母子5人は、父出征のあと、大阪から少しでも安全な所へと父の郷里である鹿児島へ引っ越した。のんびり一人暮らしていた祖母は、この急変化に大いに戸惑ったのはいうまでもない。小さな双児をかかえた母は、慣れない土地での初めての姑との同居に、育児と家事をこなすのが精一杯で、働き手にはなれなかった。祖母は少しばかりの田畑を作り自分の食い口だけまかなっていたので、当然のことながら生活は苦しく、父のいない古里とでの生活に安らぎはなかった。

初めての田舎での生活は想像以上に辛いことが多かった。言葉はまるでわからず、誤解からいじめへと発展、待ち伏せしてひどいめにあうこともしばしば。ズックを履いていると「ヨカぶっている」という。田舎では裸足でいることが当たり前だったから……。

衣類も配給制で各戸に割り当てられた点数でほんの実用品しか買えず、母の浴衣の袖がブラウスになり、黒っぽいものではモンペを作って着た。

ようやく言葉の悩みが薄らぐと、今度は「供出」というノルマだった。理由のいかんにかかわらず強制的に出さなければならなかった。食糧増産が叫ばれていたので、堆肥材料の落ち葉、軍馬の飼料になる干し草、これは乾燥させると少しになるので大量の草を刈らなければならなかったから、こどもで、しかも鎌を持ったことのない私にとって大変な作業であった。次は縄、藁を叩いて柔らかくし、縄をなう技術も覚えなければならなかった。80cmの杵にぐるぐる巻いて束を作る。これらの宿題は次々と増え、毎日が泣く思いだった。初めて手にした鎌での傷痕は今もはっきりと残っている。

次第に戦争が激しくなって、教室での授業は危険になり、黒板も机もない山学校に変わった。私は双児の弟を一人おんぶして通った。しばらくすると空襲の回数も増え、山学校は閉鎖になり、私達は学徒動員という強制労働の日々を迎えることになる。

山頂に設置される砲弾建設の資材、主としてセメント用の砂を運搬する作業だ。輸送の主力は牛馬だったけれども坂道は困難だった。私達は小さな体に布で作った砂袋を肩に、あえぎあえぎ何回も往復した。疲労と空腹でヘトヘトだった。

食糧事情は次第に悪くなり、配給米はほんの少しばかりになった。弁当箱のフタをあけるとフスマのだんごに梅干し1ケ。普通のだんごのようにまとまらず母は苦心していた。調味料は塩以外に無く、おいしい食べ物ではなかったが、それでも空腹を満たしてくれる唯一の食糧だった。いつしかこのフスマも底をつくようになり、ぶたの飼料をも口にする日が来た。ドンダリを拾い、ソテツを切り、芋の葉を塩で煮て食べた。待避した山の中で身を寄せ合って思うことは、「白いごはん」だった。「腹一杯白いごはんを食べて死にたい」そう毎日思って、白いごはんにあこがれた。

鹿屋基地から沖縄戦へ向う飛行機が激しく飛び交い、日増しに戦況の危機が感じられるようになった暑い日、弟が高熱に侵される。病院はあっても医師はおらず、むろん薬もなく、氷もない。ぬらしたタオルを替えるだけ。「Tちゃんも防空壕につれて行って……」空襲のサイレンにかぼそい声で訴えるように泣く弟を小さな布団にくるみ防空壕に待避する。すさまじい爆音と共に機銃掃射の音。あちらへ行けばあちら、こちらに来ればこちらで大きな音、壕の中を右往左往しながら恐怖におびえた。

翌日も、その次の日も、弟の熱は下がらなかったが、母は私達4人のこどもを連れて奉仕作業に出なければならなかった。母がどんなことをしていたのか知らなかったが、おそらく防空壕をつくる仕事だと思う。あとで見たその防空壕はいくつもの入口があり、中は広く通じ合っている大きなものだった。

木陰で不安な時を過ごしている私達の頭上に突然轟音が響き、松の木すれすれにB29が低空飛行して来た。米機のマークがはっきりと見え、生きた心地がしなかった。何も起こらなかったのが不思議だった。

弟の体は燃えるように熱く、その夜、闇の中で小さな生命の灯りは消えた。たった一度も医師に触れられることなく、なすすべもなく迎えたむごい死に私達は悲しみをこらえきれずただ泣いた。

小さな棺は翌日、となりのおじさんがかついで形ばかりのお葬式をした。

1週間経ち、私はひとにぎりのお米を手に、山里のお寺に詣った。じりじりと太陽が照りつける5kmの道を一人、心細く不安にかられながら歩いた。

次の弔を済ませて家にかえると、庭に空から舞い落ちる無数のビラのようなものが。異様なこの光景の意味するものが人々には不可解だった。兵隊さんがやって来て、戦争の終結を知らされる。「日本は降伏した」「明日から逃げなくていい」「奉仕作業にも出なくていい」……。人々がささやいていた。「もう少し早く終わってほしい……」何一つ医療の手をさしのべてやれなかった弟の死にそんな思いが募った。

辛く、苦しかった戦争にまつわる思い出は何十年経っても脳裏から消え去ることはないだろう。